中央有鄰学院広報誌

となりにいるよ

発行：社会福祉法人 中央有鄰学院　発行日：2024年 4月　第39号
ゆうりん　ほだか　ふれあいセンターおおだか　きょうわ　ほだかの里
〒459-8003 名古屋市緑区大高台二丁目1718
TEL 052-621-2441　FAX 052-622-5509
http://www.yuuringakuin.or.jp　Mail：info@yuuringakuin.or.jp

2024.04
Vol.39

働きやすい職場を目指して

理事長　那須野 康成

令和五年度も皆様の温かいご支援とご協力により地域の福祉に貢献出来たことに感謝申し上げます。中央有鄰学院は、ここ数年働きやすい職場改革を目指し新しい試みをしています。

働きやすい職場とは、①相手を尊重した良好な職員関係　②活発な意見交換ができる雰囲気作り　③職員の専門性を高める研修　④充実した福利厚生と離職の防止などが挙げられます。

その一つ目の試みが、外部から施設長を招くのではなく、現場で働く職員の中から各施設長を全職員による信任・不信任投票で人選する方法を五年前から実施しています。

中央有鄰学院は唯一世襲性がなく、先人たちの努力と熱意によって百年以上引き継がれ、今日の中央有鄰学院が成り立っているのです。その先人たちの熱意と意思に敬意をはらい、今後も引き続き発展させ、各職員が自ら意識して法人経営に取組んで欲しいと思います。

施設長人事では立候補、演説、投票の手順で行い投票総数の三分の二の信任を得て理事会で審議し承認を得る方法をとっています。任期は一期三年とし六年まで可能としています。実施後、五年を経過する中で、職員間の良好な関係や、仕事に関する活発な意見交換がみられ、離職者も少なくなるなど、その成果を実感しているところです。現在、施設長の任期が迫る中、投票の在り方や方法について職員間で活発な議論を重ねているところであり、今後その盛り上がりを期待しています。

二つ目は、有鄰学院は唯一乳児院から児童養護施設・自立援助ホームまで備えた法人です。その機能を十分生かすべく、乳児から成人まで一貫した育ちを保障し支援する方針を掲げ取組んでいます。以前は、同じ敷地にありながら施設間や職員間の交流にも偏りがありました。そこで、職員による施設間の人事交流（配置転換）を推し進めています。各施設の仕事を経験することで、その年齢にあった子ども理解と支援方法を身に付け、職員相互の交流を増やすことで各職員の専門性の向上を目指しています。

令和五年子ども家庭庁が創設され、それに伴い「子ども基本法」が閣議決定されました。その一部分ですが基本理念として『全ての子どもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されること』とあります。学院で生活している子どもたち全ての年齢や発達を理解することが子どもの尊厳と権利を守ることにつながると思います。

ゆうりんⅡ型はじまります

ゆうりん施設長　小尾　康友

ゆうりんで20歳まで育った後も、さらに継続して公的な支援を行えるようになりました。過去には子どもが18歳になると児童ではなくなるために、公的な制度が使えずに自立を強いることがありました。そのために、社会に出た後は孤立状態になり、悪循環が発展するケースがありました。例えば、借金や取り立てに追われる、仕事を辞めて引きこもる、DV被害、モラハラ、パワハラ、触法行為、病気等…。

近年、職員数が増えたこともあり、ゆうりんでは「となりにいる」理念の中で、年齢を重ねても、悪循環を変える支援を継続してきました。さらに、今年度からは児童自立生活援助事業Ⅱ型が制度化されて職員2名の配置と、寝泊りする場所も無償で提供できるようになりました。今後は、施設出身者や支援が必要な地域のアダルトチルドレン等へ、より丁寧な支援を行う予定です。子ども時代の影響で受けた心の傷は、大人になっても癒えないことがあります。社会が自立を強いるのではなく、社会で支える支援が出来ればと思います。

家族に寄り添い続けて…

家庭支援専門相談員　山本　久美

ほだかで家庭支援専門相談員（ＦＳＷ）の役割を担って8年が経ちました。沢山のご家庭に関わらせていただき、たくさんの事を学ばせていただきました。

世間から見放されたような家族でも、良いところや強みを見つけ出し、それを引き出せるようなお手伝いをしたり、丁寧に向き合ったりすることで、家族としての形ができてくることもあります。子どもに愛情を感じていない母親でも、職員の一言で“母親”としての自覚が芽生える瞬間を感じた時は、本当に嬉しく思うと同時に、この先、母親として成長する保護者との関わりの大切さを思い知らされます。

墜落出産し子どもを放置した保護者でも、真摯に寄り添った結果、無事に家庭復帰に繋がり、その後も親子の良好な関係が継続できていることを確認した時は、この仕事の大切さに震えました。

思いがけない妊娠でだれにも相談できず、頼る人もいない、そんな母親を何人も見てきました。ＦＳＷとして一番強く感じることは、“支援者がいるという環境はかなり重要”ということです。

出産直後は「自分で育てる！」と強く持っていた意思も、子どもとの生活が現実化すると逃げ道がなく行き詰ってしまい、最終的に離れ離れの生活を送ることになってしまうこともあります。しかし、『里帰り出産』ができる環境を提供することにより、母親のメンタルのフォローや子どもがいる生活に慣れるお手伝いができ、親子で生活できる可能性がかなり増加すると感じています。

これからほだかが取り組もうとしている『妊産婦等生活援助事業』では、これらの課題に対応し、アフターフォローも充実させ、一組でも多くの家庭に安心安全な生活をしていただこうと考えております。

今まで経験させていただいたことを活かし、今後もたくさんの子ども達が幸せな生活を送れるよう尽力したいと思っています。

F.HODAKANOSATO

ほだかの里の情報はインスタグラムまたは、ほだかの里ホームページでご確認ください。

名古屋市地域子育て支援拠点

ふれあいセンターおおだか

ママ講座のおやつ作り

ほだか職員によるパパ講座

昨年度もたくさんの親子さんに、ふれあいセンターおおだかを利用していただきました。

数ヶ月前に出会った子どもたちがハイハイをしたり、歩き始めたり言葉が出始めるなど、日に日に成長する姿をたくさん見せてもらいました。歩くのが遅い、言葉が遅いなどの相談を受けることもありましたが、そんな心配も今では喜びに代わりました。ある母親は「ふれあいセンターで覚えた歌を歌ってくれます。」と嬉しそうに話しをしてくれます。他にも「2，3歩歩けるようになりました。」「オムツが取れてパンツで過ごせるようになりました。」などお母さんから嬉しい報告を聞く毎日です。

ふれあいセンターにきている親御さんが、他のお子さんが何かできるようになると褒めたり、励ましの言葉をかけてくれたりします。ここには喜びを共感したり、相談したり、話を聞いてくれる仲間がいます。私たち職員もしっかりとサポートしていきたいと思います。

厨房だより

マグロの解体ショー

ゆうりんでは毎年3月末に大きくなったね会を行っています。卒院・卒業する子の思い出を振り返るとともに、厨房職員が手作りでごちそうを作って皆で食べます。

今年のメニューは、ピザ（マルゲリータ、ミックス）・手巻き寿司・フライドポテト・唐揚げ・ローストビーフ・果物などの盛り合わせ・グラタンでした。毎年大きくなったね会の料理を作りながら、「あの子は大きめの制服を着た姿がとても可愛らしかったな」「テストの日は早くに起きてお弁当を持って行っていたな」「ほだかに来た時から離乳食をよく食べていたけれど、大きくなっても食べることが好きでいてくれて良かったな」など、子どもたちとの関わりを思い出しながら調理をしています。

先日、家庭復帰した子がゆうりんに来た際に、「やっぱりゆうりんのご飯っていいよね」と声をかけてくれました。どうせ食べないから用意しないのではなく、その時には気付かないかもしれないけれど、あなたのことを思っているよという気持ちを込めて、食事を用意することの大切さに気付かせてくれた言葉でした。

子どもたちはあっという間に大きくなりますが、その大切な体を作る食事作りに関わることができるこの職業にとてもやりがいを感じつつ、体も心も健康に、すくすくと大きくなっていってほしいと願っています。

子ども食堂「もりカフェ」の情報は
インスタグラムでご確認ください

@MORICAFE.YUURIN

ひとり暮らしを経験して今思うこと…

きょうわに入所しているＩくんが過去のことを話す際は、必ずと言っていいほど「一人暮らしの失敗経験があったからこそ頑張ることができている。」と語るほど、彼の中で一人暮らしの経験は印象的だったようです。そういった意味では、時に躓きを経験することも大事なことといえるのではないでしょうか。そんな彼が、思いもよらぬかたちで再び躓くようなことがあったとしても、希望をもって次に繋げていくことができるように、できる限り隣で支えていきたいと考えています。

（インタビュアー　きょうわ職員　新村　光希）

―きょうわに入所する前のことを教えてください

高校退学を機にゆうりんを退所し家庭復帰となりましたが、親との関係不調があったため家を出ることになりました。ステップハウスに入居してバイトをしていましたが、初めての一人暮らしの中で携帯代や生活費の支払いといった金銭管理が上手くいかず困っていました。

高校は退学しましたが、高卒資格は欲しいと改めて考えたので、ステップハウス入居中に夜間の定時制高校に入学しました。それまでは昼夜のバイトでしたが、定時制高校に入学してからは昼にバイト、夜は学校という生活をしていました。きょうわに入所したあとも同じ定時制高校に通学しています。

―きょうわに入所したきっかけは

ゆうりん職員には退所後も会っていたので一人暮らしで困っていることを相談したところ、支える会（※中央有鄰学院職員有志の会）に繋いでもらって借金の清算や定時制高校の学費を援助してもらいました。その際にきょうわへの入所を勧められ、児相を通じてきょうわと契約することになりました。

借金返済と高校卒業がきょうわに入所する目的だったので、アルバイトと学業を両立するために頑張りました。自分はステップハウスでお金のことにつまずいた分、きょうわでの生活や借金の返済に身が入ったのだと思います。

借金の多くは自分のものではなく親から課せられたものでしたが、すべては自分に知識がなく、安易に保証人になってしまったという自分の失敗という認識です。経験値として必要だったと考えています。

―返済期間はどれくらい？

きょうわの担当職員と一緒に返済計画を立てて、学校に通いながらバイトを続けて毎月決まった額を返済していました。まずは2年間でそれまでの借金を返済し、その後支える会にも半年かけて返済しました。

支える会へは1年かけて返済する予定でしたが早く終わらせたかったので毎月の返済額を予定より増やして半年で返済しました。支える会の会議にも出席して担当職員と一緒に返済計画を説明して、返済が完了した月にも報告に行きました。

―もともとはゆうりんの入所児でしたが、ゆうりんときょうわとで違うと思うことはありますか

きょうわの入所児のなかには高校生くらいの年齢だけど施設出身ではない子もいます。最初のうちはそういった集団生活に慣れていない子と生活をしていくのは気になりました。ただ、年齢が高い子が多い分きょうわの方がルールに自由が多いと思います。

きょうわは部屋の掃除や洗濯などは自分でやらないといけません。ステップハウスやきょうわでの生活を通じて身の回りを綺麗にすることに意識が向くようになりました。特に掃除や寝具の洗濯などの習慣は以前よりも気にするようになりました。

―ゆうりんとは今でも関わっていますか

卒院生ということで現在でも連絡があります。正月にゆうりんに泊まりに行ったり、餅つきやフットサルに行ったりと卒院生イベントには積極的に参加しています。

他の卒院生の中にも話している人がいますが、ゆうりんは「第2の実家」のような感覚です。

―最後に言いたいことや伝えたいことをどうぞ

今の目標は高校卒業と、その後の大学進学・卒業です。ゆうりんの中には高校を退学する子もいて、そういう子に自分の頑張っている姿を伝えて「中退してもやれることがあるよ」ということを知ってもらいたいです。

あとは、ゆうりんやきょうわを退所して一人暮らしを始めて困っている子はたくさんいると思うので、支える会の存在を多くの卒院生に知ってほしいですね。

それに、ゆうりんの子もきょうわの子も、一度は一人暮らしをしてみると良いと思っています。お金のことや身の回りのことを自分でやらないといけない苦労は一人暮らしをしてみないとわからないと思うので。

【ステップハウス】

施設退所者等が就労し自活するにあたり、住居の提供を行い、無理のないステップでの自立を促進し生活の安定を図ることを目的とした事業です。

【ひとりひとりを支える会】

中央有鄰学院に関わる子どもたちを支えることを目的として発足された有志の任意団体です。これまでは卒院生を中心とする子どもたちへの支援が大部分を占めていましたが、最近では施設入所中の子どもやその保護者の支援にも活用されるケースが増えており支える会のニーズも幅広くなってきています。

自分を伝える言葉

ゆうりん　三宅　晶

20代後半、2年半アフリカで暮らしていた頃、フランス語を介して少しずつ現地語を覚えて、いろんな人たちと交流をしていた。

初めの頃は本当に伝えたいことはまず日本語でシンプルに組み立て、下手くそなフランス語を使ってフランス語が話せる現地の人に現地語を教えてもらって、紙に書いて何度か練習して、やっと自分の気持ちを相手に伝える、というひと仕事がたいへんだった。本当に言いたいこと以外話せず、ちょっと無口になった時代だった。ささやかな楽しみは日本人仲間とのおしゃべりと日本語の小説。

言葉のレベルでは赤ちゃんで、聴いてオウム返しすることで覚えていった。目の前でやりとりしている意味がわからない分うわさに振り回されることもなく、ただ（何かバカにされている！）と感じるときには怒りを日本語でまくし立てた。現地のつたない言葉で言い返しても相手は「こいつ何言ってるかわかんないよ」とゲラゲラ笑われるが、こちらが気持ちを100％込められる日本語で「あんたたち失礼だって言ってんの！」と本気で怒ると、現地の人は勢いに驚いて意味の分からない言葉に恐怖を抱き「おいおいどうした、落ち着けよ」と笑わずになだめようとした。

その町での暮らしも慣れてきて、仲良くなった近所のおうちでそこのおばあちゃんがいい顔して暮らしているのを見て、この人は自分の人生をこの現地語で全部言うことが出来るんだな、と思ったときにドキッとした。私は日本語で自分の人生をすべて語ることが出来るのか？私は日本語で自分の気持ちをきちんと伝えることが出来るのか？とんでもない、できない、と思った。まだまだ未熟で表せる人生もない。

そのあと現地語もずいぶん上達し、現地語でできるコミュニケーションが増えた。仲良くなって助けてくれる現地の知り合いが増えて町の生活も快適になった。今でもふと現地の単語を思い出す。

今、たくさんの子どもと出会って話す仕事に就いて、日本語で自分の気持ちや考えを伝えることができているかな、子どもたちの気持ちや表現を正面から聴くことができているかな、世代の違う同僚たちと気持ちを伝え合っているかな、と季節が変わるたびに思う。20代の頃よりは成長して、あの頃の経験が私を支えている。

職員紹介

きょうわ　磯崎　彩香

―きょうわでは自立支援担当職員をされていますが、どういったことをしていますか

入所者については進路や奨学金・助成金の相談、退所が近くなるとアフター移行の準備に関わる部分のサポートをしています。

退所者については LINE や電話での相談の他、学校関係・公的機関の手続きのサポートなど退所者の数だけ色々な仕事があります。悩むことも多く、関係機関の方々と連絡を取り合い助けてもらっています。

LINE では相談だけでなく、旅行中の写真やご飯の写真などを送ってくれる子たちもいます。何かあってもなくてもふと頭に思い浮かぶ存在でありたいなと思っています。

―入所者とやりとりをする中で気を付けている事を教えてください

自分で選択をして人生を決めていけるよう、本人のやりたい気持ちを大事にして私の基準で否定せずに、どうしたら叶えられるかを一緒に考えたいと思っています。そのために日々の生活の中でどれだけ会話を重ねられるか試行錯誤していますし、入所者がきょうわに来てよかったなと思える関わりを心がけています。

―入所者と関わる中で嬉しかったことはありますか

感覚的なところではありますが、入所した頃の警戒した鋭い目つきや表情がきょうわで過ごすうちにすっかり柔らかくなったり、その子の発した言葉のチョイスひとつに内面的な成長を感じたりした時に嬉しさを感じます。

―休日はどう過ごしていますか

家でゴロゴロしたり仕事の日はなかなかできていない掃除をしたりしてゆっくり過ごすことが多いです。芸人さんのラジオを聞きながら家事をすると捗ります。大学の友人が色々な地域に住んでいるので旅行がてら会いに行くのも楽しみです。

ほだか　酒向　海史

―ほだかのここが好き！を教えてください

事務所に活気があるところです。女性が多い職場の為とても賑やかで、美味しいご飯の話やちょっとした笑い話など、息抜きにちょうどいい雰囲気が作られていることがほだかの良い面でもあり、好きなところです。事務所でパソコンをやっていると、子どもたちから「かいくーん」と呼ばれることもあります。事務所が閉鎖的な空間ではなく、子どもとも関われる場所になっているのが好きです。

―ほだかでは数少ない男性職員ですが、何か工夫していることや気にかけていることはありますか

出来るだけ体を使った遊びを行うようにしていて、抱っこやおんぶをよくしています。この前は子どもにたかいたかいをしたのですが、気に入ったようで会うたびに「たかいたかいして！」と言われます。体力には自信があるので、力仕事も積極的に行うようにしています！

―休日の過ごし方や趣味を教えてください

休日は外で買い物や飲み会をするか、野外でキャンプをしています。ワイワイ騒ぐのも好きなのですが、一人で向き合う時間も設けるようにしています。最近ガラスペンを購入したので、雨の日はちょっとしたイラストを描いてストレスを発散しています。雑貨屋やアウトドアショップへ行くのも好きですが、費用に妥協をしたくないので、浪費が続いています。

―最後に一言どうぞ

まだ二年目で分からないことも多いですが、子ども達や先輩達に支えられながら毎日楽しく働くことが出来ています。職場の雰囲気にも慣れ始め、少しずつ周りの人に対する余裕も出てきたため、これまで以上に積極的に子どもや職員の方とのコミュニケーションを取っていきたいと思います。子ども達が毎日笑顔でいられるような安心感を与えられる職員になれるよう日々精進していきます！

ご支援ありがとうございました

令和5年9月1日から令和6年3月31日までに、寄付・寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々のご紹介をさせていただきます。紙面の都合上内容は省略させていただきます。
（順不同・敬称略）

【個人】
水野恭宏　早川富雄　下村康範　佐藤孝介
山口ミツノ　久野すみ子　浜島よし子
丹羽博久　こみなと　松山信　荒木まどか
塚本潤　斉藤かつ巳　藤淳磨　川崎和代
神野克己　山口保　山田佳世乃　山口裕司
生田卓也　田中尚己　吉川志保　植前早苗
松岡恒平　門司一徹　下村鉦子　工藤憧吾
里中麻理子　中島絢子　内田光彦　中江文
安田寿子　榎本卓純　ジェイムスヘイブンス
瀬川卓也　川端定雄　川瀬喜世美　林千愛
都竹有美　篠宮由美　小川康一郎
吉長敦子　近藤弘規　夏目俊信　山本奈央
ナカムラキヨシ　大畑知萌香　大島はる
サンタ　稲垣佐織　飯野真理　白岡三奈
横山幸一良　山本由紀　小出玲爾　沓名健
沓名章　りんりん　平田悠里　金田和久
榎八重　谷本美枝子　山口忠徳　千賀富良
丹羽佳奈　山本賢次　金城優　工藤幸子
小山泰弘　阪野正信、きよこ　田中誠治
籾山有希子、祐介、りこ　yamaguchi
伊澤幸一　佐藤隆　松本和也　寺尾朋美
有馬櫻　持橋いくよ　マリアゴデブスカ
岩田佐奈　小島江那　石井祐治　森政樹
真木芳子　中島光利　新留好美　山口裕
堀川道子　佐伯誠　山口実　近藤加代子
伊藤壽重　近藤八郎　那須野亮　山口諒真
杉浦孝一　森山陽介　藤川尚士　青木勉
山岸せい子　川辺清次　植田望　近藤幸江
町野芳恵　下澤いづみ　朝倉絹代　櫻井碧
玉利洋介　宗吉美雪　紙屋祝子　安田訓明
久野章雄　河西ヒロ子・知子　丸田優子
一杉治夫　小川康元　松永勲　後藤雪江
花井正紀　山口浩導　田島紀美子
奥野知秀　遠島万里子　竹田登志也
土居万里子　柳谷真智子　山見由紀子
生田あさ美　福嶋俊郎　矢守信昭　小島啓
柴橋佳幸　伊藤吟子　伊藤富雄　紙屋裕安
城下奈緒　日比野翔　藤本義岩　小田義信

【団体】
ヒルズウォーク徳重ガーデンズ店　包む
チュチュアンナ1%クラブ　三菱電機
タリーズコーヒージャパン　フレーベル館
セブンイレブンジャパン　KEIZ大高店
南大高町内会　尾州商会　名古屋食糧
大塚商会　名古屋稲穂隊　中部善意銀行
東海理化クリエイト　フェリシモ
クリーンライフトシノリ　チーカス
コストコホールセールジャパン中部空港倉庫
コストコホールセールジャパン守山倉庫店
緑区更生保護女性会　タキヒョー
リプレット基金事業財団　パンパーネ
ミライプロジェクト　日本鏡餅組合
JAあいち経済連パールライス安城工場
明治安田生命　名古屋食肉三水会協同組合
全国シャンメリー協同組合　カプセル
ソロピッツァチェザリ　オールドリバー
日本出版販売　南生協病院　SBIFXトレード
CBCチャリティー募金　小島歯科医院
光ネットワーク協同組合　ワイドグループ
ブライド・トゥー・ビー　BACKSTAGE
日立システムズ中部支社　味仙今池本店
アップルシンフォニー　一歩の会　文創
名糖産業　大高北学区女性会　緑鯱城会
フィリップモリスジャパン　日本文教社
トヨタシステムズ　ワイドワン　ユウシン
日本ベビーフード協議会　東芝中部支社
MPソリューション　餃子の王将豊明店
フジトランスコーポレーション　クレイブ
愛知ダイハツU-CAR鳴海店　大橋製作所
緑区社会福祉協議会　マイカースズキ
明治ホールディングス　グランマchie
一歩の会　あいおいニッセイ同和損保
三菱地所　小松屋クリーニング　ニッセツ
ファミリーマートフードドライブ　すみれ
エコ・ポリス　豊明損保センター　鶏工房
ジャパンフォレスト　水野工務店　勝鬘寺
エスティケー　炉ばた焼さとる　井上紙店
東亜ライン　名工建装　中部メディカル
霊友会「ありがとうこだま基金」　圓道寺
守山商工会　鳴海商工会　有松商工会
中京大遊びグループ　ぐるーん　哲男さん
中部楽器技術専門学校　ヒューテック
H&Y　中日本興業　愛知県共同募金会
DRCT災害復興協力チーム　連合愛知
ファイティングイーグルス名古屋
名古屋ワイズメンズクラブ　冨士ダイス
ISOGAI花火劇場　中日新聞社会事業団
木曽路　資生堂子ども財団　リクルート
グループエスカラデー　アートワークス
パスタディフランコ　聖マリア在俗会
名古屋名南ロータリークラブ　シュリンプ
東山ロータリークラブ　名古屋商工会議所
イシダ総合システム株式会社　鳴海教会
イトウ　児童福祉の架け橋

◆寄付里親はこちらのQRコードから登録できます。ご協力お願い致します。

4月から地域小規模児童養護施設「のぞみ」が新しく開設されました。

COLUMN

叱るという言葉が使われる時は、少なからず上下関係が存在しています。

「親が子どもを叱る」「先生が生徒を叱る」「上司が部下を叱る」ということはあってもその逆はないわけです。

要するに「叱る」時は、すでにその人の言っていることが正しいという前提になるため、叱られた側は、それが本当に正しいかどうかにかかわらず、その関係性によって受け入れなければならないことが殆どです。

いっぽう「怒る」というのは、立場に関係なく使える表現です。子どもがお母さんに怒ることだってできるし、お母さんが子どもに怒ることもできます。感情的なコミュニケーションではあるものの、誰もが平等に使えるこの「怒る」という表現が悪いようには思えません。バカにされたり、尊厳を傷つけられるようなことがあれば、相手が誰であれ怒っていいと思うんです。

子どもと関わる時に、「叱るのは良いが、怒るのは良くない」という人もいますが、どちらが良い悪いではなく、「怒る」ことと「間違いを正す・教える」ことをごちゃまぜにしなければ良いだけだと思うんです。怒りや圧によって相手をコントロールしようとしなければ良いだけと思うんです。

ちなみに昔、体罰をしている学校の先生に対して、「体罰は良くない」ということを穏やかに伝えたのですが、結果ひどく叱られてしまいましたね。